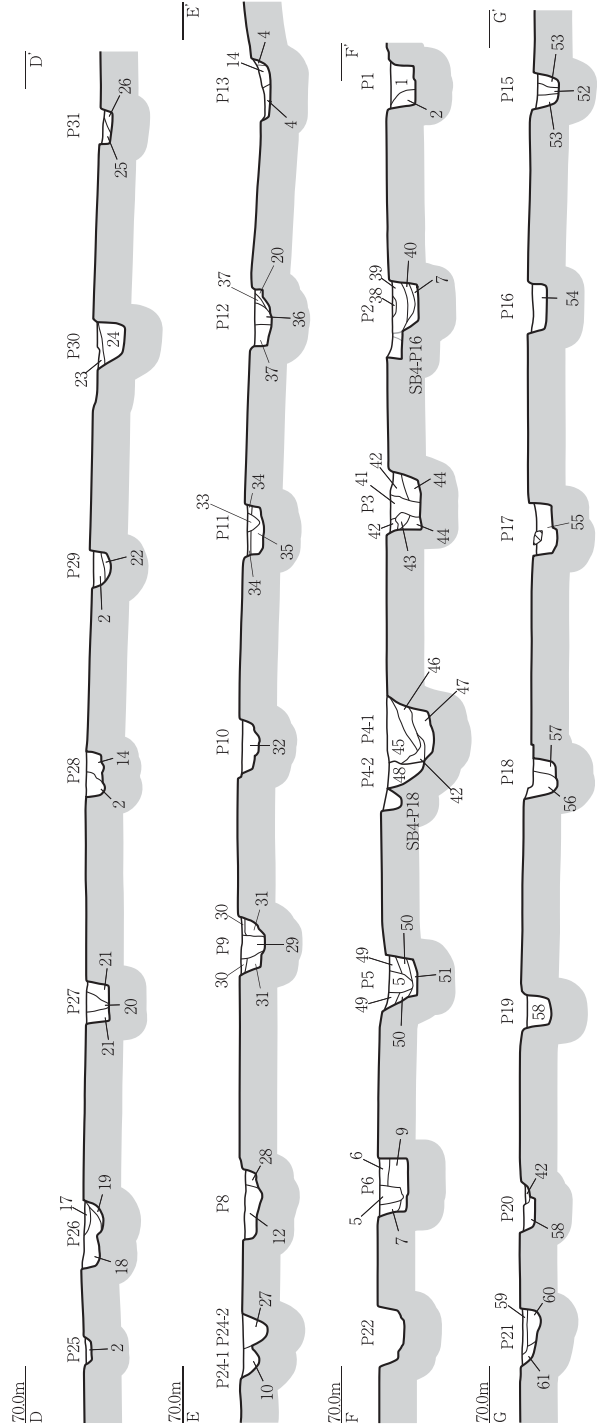


- 1 黒色土 (10YR2/1) 地山礫多量に含む。
- 2 黒褐色土 (10YR3/1) 均質。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 地山礫多量に含む。
- 4 黒褐色土 (10YR2/3) 地山ロームブロック含む。
- 5 黒色土 (10YR2/1) 締まりややあり。柱痕跡。
- 6 黒褐色土 (10YR3/2) に黄褐色土 (10YR5/4) 混 しまりややあり。
- 7 黒褐色土 (10YR2/2) 均質。
- 8 暗褐色土 (10YR3/3) にい黄褐色土 (10YR5/4) 混
- 9 黒色土 (10YR1/1)
- 10 黒褐色土 (10YR2/2) 地山ローム粒含む。
- 11 黒色土 (10YR2/1) 地山ローム粒わずかに含む。
- 12 黒褐色土 (10YR2/2) 地山ブロックわずかに含む。
- 13 黒褐色土 (10YR2/2) 地山ロームブロック・礫含む。
- 14 黒色土 (10YR2/1) 地山ロームブロックわずかに含む。
- 15 黒褐色土 (10YR3/2) 地山ロームブロック含む。炭化物わずかに含む。
- 16 褐灰色土 (10YR4/1) 地山ロームブロック多量に含む。
- 17 黒褐色土 (10YR3/2) 炭化物・地山ロームブロックわずかに含む。
- 18 黒褐色土 (10YR2/3) 地山ローム粒わずかに含む。
- 19 黒色土 (10YR2/1) 均質。
- 20 黒褐色土 (10YR3/2) 地山ロームブロック含む。
- 21 黒褐色土 (10YR2/1) 炭化物・地山粒わずかに含む。
- 22 黒褐色土 (10YR2/2) 地山ローム粒わずかに含む。よくしまる。
- 23 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ローム粒含む。土器出土。
- 24 黒色土 (10YR2/1) 地山ローム粒含む。
- 25 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ロームブロックわずかに含む。
- 26 黒褐色土 (10YR3/2) 地山ロームブロック多量に含む。
- 27 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ロームブロック含む。
- 28 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ロームブロック含む。しまる。
- 29 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒わずかに含む。柱痕跡。
- 30 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ブロックわずかに含む。
- 31 黒褐色土 (10YR2/3) 締まりあり。
- 32 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ブロックわずかに含む。しまりややあり。
- 33 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ローム粒含む。
- 34 黒褐色土 (10YR2/1) 地山ロームブロックわずかに含む。炭化物わずかに含む。
- 35 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒わずかに含む。しまりあり。
- 36 黒色土 (10YR2/1) 締まりなし。
- 37 黒色土 (10YR2/1) 地山ロームブロック含む。
- 38 にい黄褐色土 (10YR5/3) 地山礫多量に含む
- 39 黒色土 (10YR2/1) やや粘質。
- 40 灰黄褐色砂礫 (10YR4/2) 地山礫多量に含む。
- 41 黒褐色土 (10YR3/2) 地山礫含む。しまりなし。柱痕跡。
- 42 黒褐色土 (10YR2/2) 地山礫含む。
- 43 暗褐色土 (10YR4/3) 地山礫含む。
- 44 黒褐色土 (10YR2/3) 地山礫含む。しまりなし。
- 45 黒色土 (10YR2/1) 地山礫含む。
- 46 黒褐色土 (10YR3/2) 地山礫多量に含む。
- 47 黒褐色土 (10YR2/3) 地山礫含む。
- 48 灰黄褐色土 (10YR4/2) 地山礫含む。しまりなし。
- 49 黒褐色土 (10YR3/1) しまりややあり。
- 50 灰黄褐色土 (10YR4/2) 地山粒含む。
- 51 褐色土 (10YR4/4) に黒褐色土 (10YR2/2) 混 地山礫含む。
- 52 黒褐色土 (10YR3/1) 砂礫・土器含む。
- 53 黒褐色砂質土 (10YR3/2) 砂礫多量に含む。
- 54 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 砂礫多量に含む。
- 55 黒褐色土 (10YR3/1) 地山礫含む。
- 56 黒褐色土 (10YR3/2) 地山礫・土器含む。柱痕跡。
- 57 暗褐色砂質土 (10YR3/2) 地山礫含む。
- 58 黒色土 (10YR2/1) 地山粒わずかに含む。
- 59 黒褐色土 (10YR3/2) 均質。
- 60 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ローム粒わずかに含む。
- 61 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ロームブロック・礫を含む。
- 62 黒褐色土 (10YR3/2) 地山粒含む。柱痕跡。



第10図 SB3(2)

表1 SB3柱穴一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	52×50-27		P 16	49×32-13	
P 2	72×62-35		P 17	57×46-31	
P 3	90×69-40	柱痕跡径15cm	P 18	43×43-35	柱痕跡径28cm
P 4-1	80※×65-50		P 19	43×40-36	
P 4-2	40×40-45	柱痕跡径20cm	P 20	61×43-17	
P 5	71×60-43	柱痕跡径22cm	P 21	63×52-25	
P 6	76×59-37	柱痕跡径24cm	P 22	67※×61-29	
P 7	62×60-33		P 23	70×52-32	柱痕跡径22cm
P 8	80×72※-25		P 24	43×39-24	
P 9	73※×67-29	柱痕跡径23cm	P 25	35×33-12	
P 10	70×57-24		P 26	85×51-24	
P 11	67×58-13	柱痕跡径17cm	P 27	63×48-31	柱痕跡径20cm
P 12	60×48-24	柱痕跡径22cm	P 28	49×45-19	
P 13	68×51-22	柱痕跡径24cm	P 29	45×42-21	
P 14	71×69-14		P 30	55×48-29	
P 15	41×41×29	柱痕跡径23cm	P 31	45×41-16	

しが行われている。

柱掘方の深さは、入側柱が13～50cmの範囲で、平均値が 27.67 ± 9.46 cm、側柱が12～36cmの範囲で、平均値が 25.11 ± 7.35 cmである。入側柱よりも側柱のほうが浅く、平面規模と同様の傾向がある。

柱掘方埋土は黒褐色の土に地山のロームや礫が混ざったものである。入側柱ではロームと礫混ざり具合の異なる土を交互に重ねた様子が確認できるが、側柱にはそれがない。

柱痕跡をいくつかの柱穴の埋土上面および断面で確認した。平面形状は円形で、直径は入側柱が20～28cm、側柱が22～28cmであり、ほぼ同規模である。

入側柱の柱痕跡および、掘方底面に残る柱当たりの痕跡の並び具合を見ると、一直線上に揃わないが、柱掘方として捉えれば、ほぼ一直線上に並ぶ。これに対して側柱は東桁側と南梁側の並びが乱れている。

身舎の柱間寸法は、東桁側柱列が北(P 1)から順に2.3m・2.1m・2.4m・2.6m・2.3m、西桁側柱列が北(P 13)から順に2.6m・2.2m・2.2m・2.2m・2.2m・2.6mである。梁行は、北妻側柱列が東(P 1)から順に2.5m・2.7m、南妻側柱列が東(P 6)から順に2.6m・2.7mである。

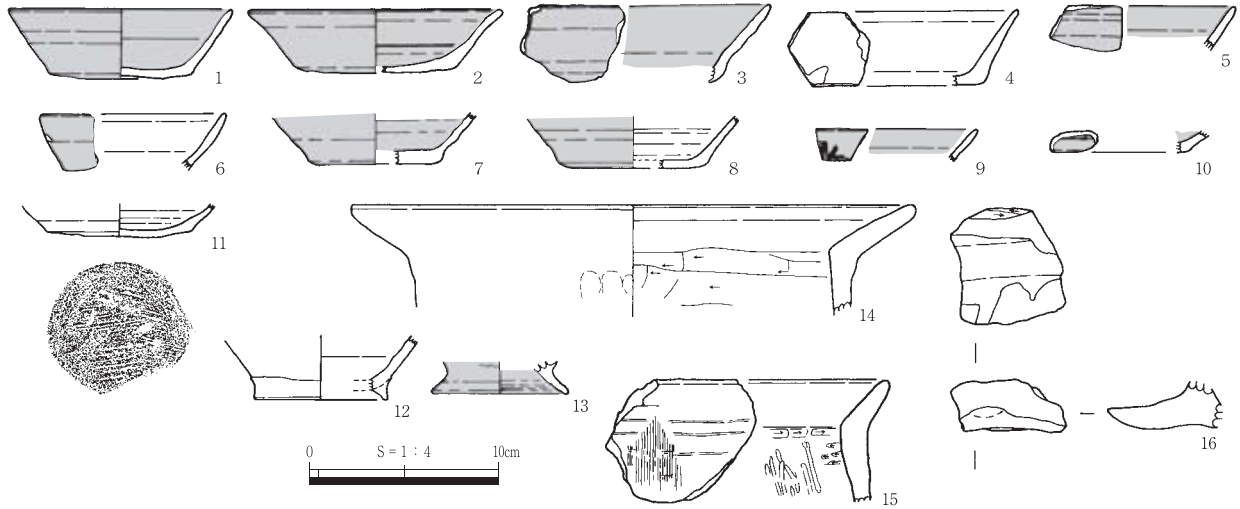
廂の柱間寸法は、東桁側柱列が北(P 15)から順に2.4m・2.3m・2.5m・2.4m・2.2m・1.2m、西桁側柱列が北(P 13)から順に2.2m・2.5m・2.1m・2.5m・2.5m・1.2mである。梁行は、南妻側柱列が東(P 21)から順に1.0m・3.0m・2.2m・1.7mである。

廂の出については、東の桁側が平均 1.33 ± 0.08 、西の桁側が平均 1.48 ± 0.11 m、南の妻側が平均 1.5 ± 0.1 mとなり、東の桁側が若干狭い。また、身舎と廂の南東、南西の隅柱の角度(南東P 6-P 21、南西P 8-P 25)は、それぞれS-45°-E、S-50°-Wを測ることから、隅木の方向を45°近くに揃えることで、桁側と梁側の屋根の勾配を同一にしていたことが伺える。入側柱と側柱はおおよそ対の位置関係にあり、身舎と廂の柱筋を通す意図が窺える。しかし、入側柱と比較した側柱の通りの悪さは、入側柱の建立後に、入側柱に合わせるように側柱の位置を定めたことが推定できる。

遺物は、柱掘方埋土中から出土した。1～11は赤色顔料塗彩の土師器片であり、伯耆国庁第2段階

に相当する。9(P4-2出土)と10(P6出土)は墨書土器である。11は柱痕跡内からの出土であり、底部外面にヘラ切り後、板目の跡がついている。12は須恵器高台坏でP2からの出土、13は土師器高台坏でP18から出土した。14と15は土師器甕である。16は土師器竈の庇の部分である。

SB3の時期は、出土遺物から9世紀後半ごろと推定できる。



第11図 SB3出土遺物

SB4 (第12~14図、表2、PL.5~7・18、巻頭図版1)

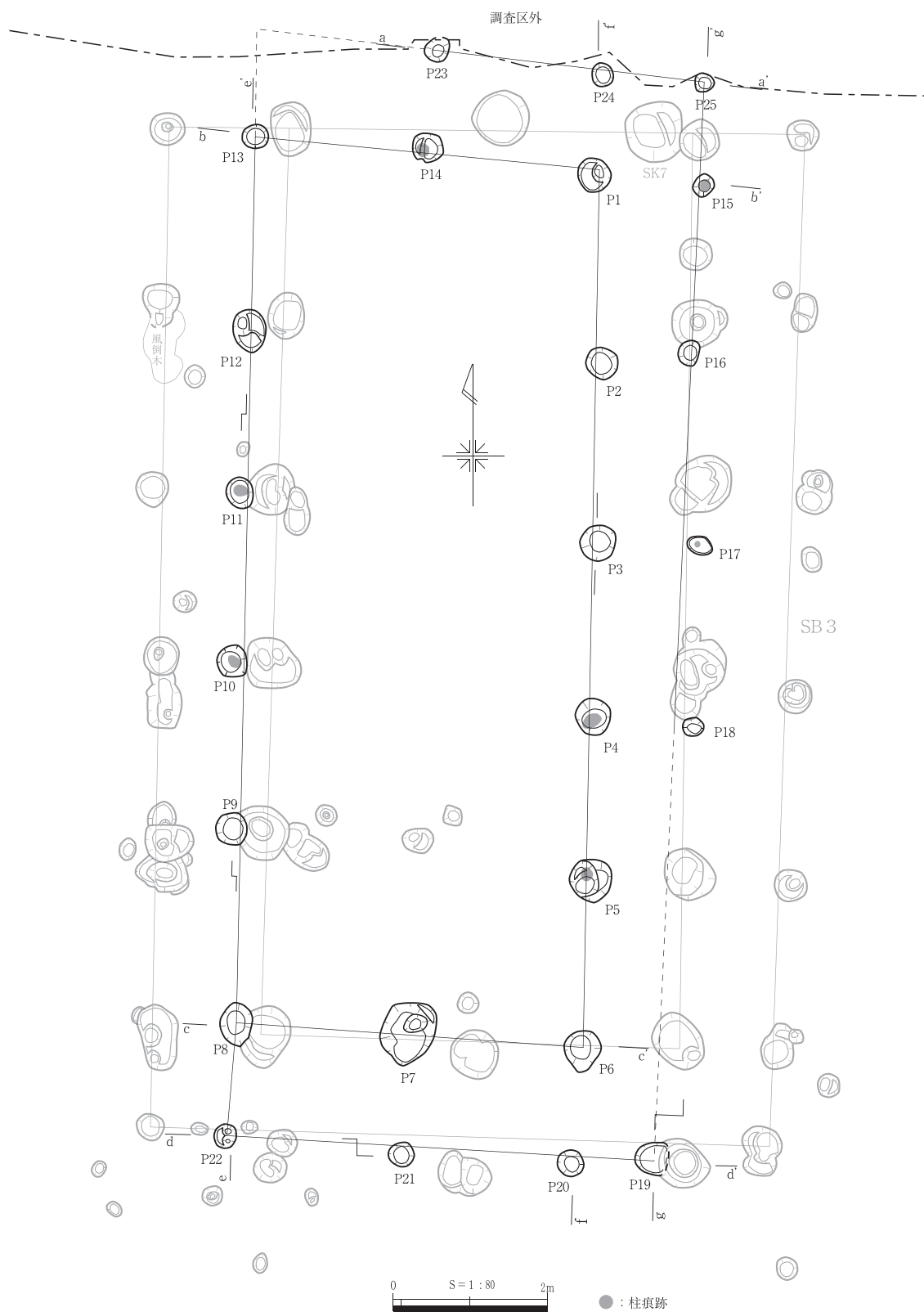
調査区中央部の北寄り、B6、B7、C6、C7、D6、D7グリットにまたがって検出した。標高69.2~69.7mの緩斜面に位置する。黒色の遺物包含層(D層)を掘り下げ、漸移層(E層)の上面で柱穴を検出した。SB3の柱穴との切り合い関係から、SB3よりも新しい建物である。

建物本体は桁行5間(11.4m)、梁行2間(4.4m)の南北棟(N-2°-E)であり、西側桁側を除く三方の外周に柱穴列を伴う、総桁行7間(14.2m)、総梁行3間(5.6m)の三面廂建物である。東側の廂の幅を西側に当てはめると、SB3の西側柱列と一致することから、SB3の西側柱穴を再利用した四面廂建物の可能性がある。建物の中軸線はSB3よりも0.9m西へ移り、身舎の桁行長が40cmの縮小に対して梁行長は1m縮小している。西側の入側柱列は、SB3の西入側柱列の西に隣接し、P8~P10においてはSB3の柱掘方の西端を切っている。東の入側柱列はSB3の柱列よりも約1.4m西側にずれ、東の側柱列は、SB3の東の入側柱列とほぼ一致する。P18~P19間に存在が予測される2基の側柱掘方は検出できなかった。柱掘方の平面形は円形または不整形である。平面規模は、入側柱の平均値が、長径 $48.86 \pm 12.41\text{cm}$ 、短径 $43.64 \pm 8.98\text{cm}$ であるが、特に長径40~60cm、短径30~50cmの範囲に集中分布する。側柱は長径25~35、短径20~35cmの範囲に集中分布する。平均値は長径 $32.2 \pm 5.39\text{cm}$ 、短径 $28.64 \pm 6.08\text{cm}$ である。入側柱に比べて側柱が小さく、約3分の2程度である。SB3と比較すると、入側柱が約4分の3、側柱が約3分の2の規模に縮小している。

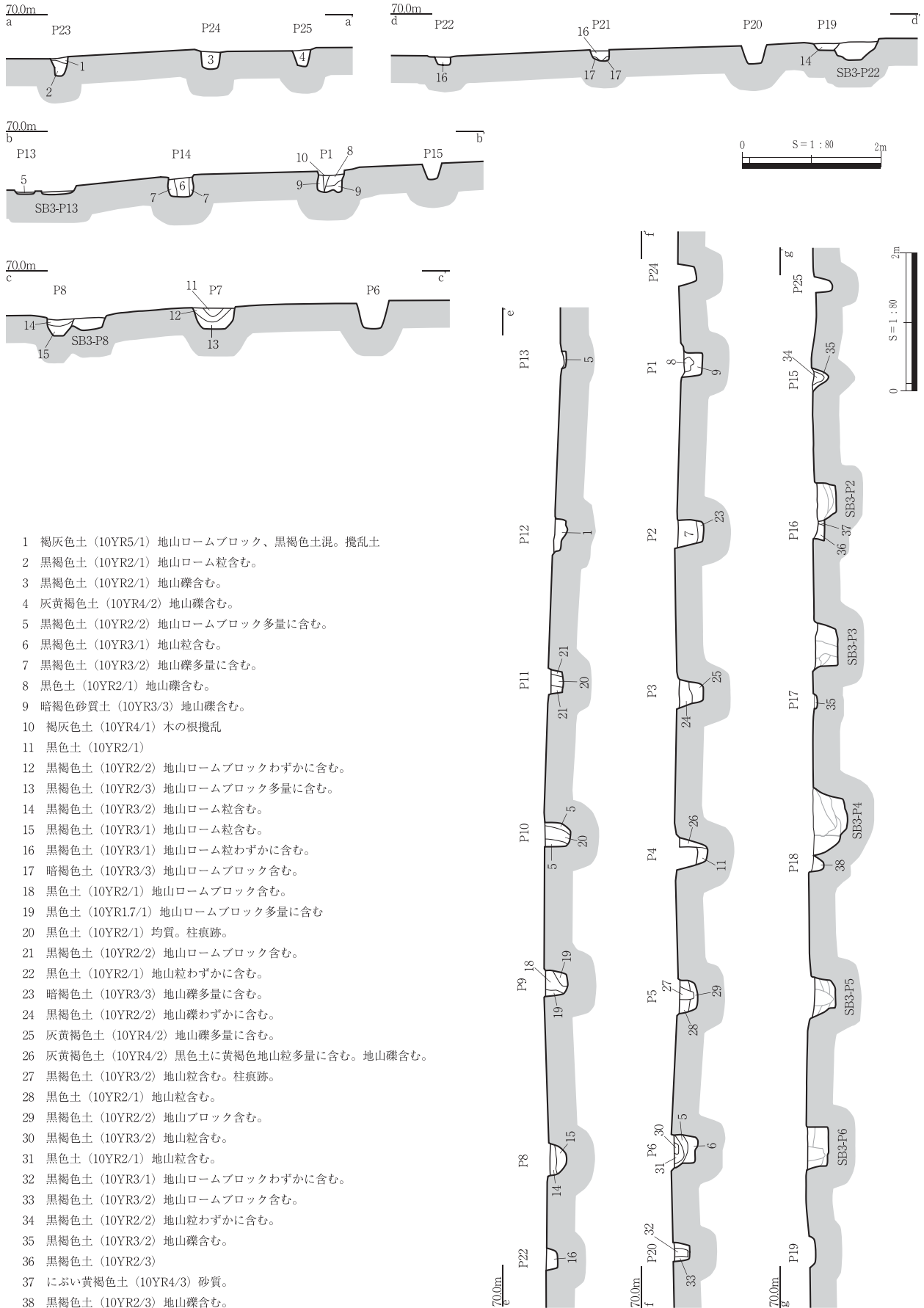
柱掘方の深さは、入側柱が5~46cmの範囲で、平均値が $32.86 \pm 11.14\text{cm}$ 、側柱が4~25cmの範囲で、平均値が $18.91 \pm 6.66\text{cm}$ である。入側柱よりも側柱のほうが浅く、平面規模と同様の傾向がある。

柱掘方埋土は、黒褐色の土に地山のロームや礫が混ざったものである。SB3と同様に、入側柱では混ざり具合の異なる土を交互に重ねた様子が確認できる。

柱痕跡をいくつかの柱穴の埋土上面および断面で確認した。平面形状は円形で、直径は入側柱が19



第12図 SB4(1)



- 1 褐灰色土 (10YR5/1) 地山ロームブロック、黒褐色土混。攪乱土
- 2 黒褐色土 (10YR2/1) 地山ローム粒含む。
- 3 黒褐色土 (10YR2/1) 地山礫含む。
- 4 灰黄褐色土 (10YR4/2) 地山礫含む。
- 5 黒褐色土 (10YR2/2) 地山ロームブロック多量に含む。
- 6 黒褐色土 (10YR3/1) 地山粒含む。
- 7 黒褐色土 (10YR3/2) 地山礫多量に含む。
- 8 黒色土 (10YR2/1) 地山礫含む。
- 9 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 地山礫含む。
- 10 褐灰色土 (10YR4/1) 木の根攪乱
- 11 黒色土 (10YR2/1)
- 12 黒褐色土 (10YR2/2) 地山ロームブロックわずかに含む。
- 13 黒褐色土 (10YR2/3) 地山ロームブロック多量に含む。
- 14 黒褐色土 (10YR3/2) 地山ローム粒含む。
- 15 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ローム粒含む。
- 16 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ローム粒わずかに含む。
- 17 暗褐色土 (10YR3/3) 地山ロームブロック含む。
- 18 黒色土 (10YR2/1) 地山ロームブロック含む。
- 19 黒色土 (10YR1.7/1) 地山ロームブロック多量に含む
- 20 黒色土 (10YR2/1) 均質。柱痕跡。
- 21 黒褐色土 (10YR2/2) 地山ロームブロック含む。
- 22 黒色土 (10YR2/1) 地山粒わずかに含む。
- 23 暗褐色土 (10YR3/3) 地山礫多量に含む。
- 24 黒褐色土 (10YR2/2) 地山礫わずかに含む。
- 25 灰黄褐色土 (10YR4/2) 地山礫多量に含む。
- 26 灰黄褐色土 (10YR4/2) 黒色土に黄褐色地山粒多量に含む。地山礫含む。
- 27 黒褐色土 (10YR3/2) 地山粒含む。柱痕跡。
- 28 黒色土 (10YR2/1) 地山粒含む。
- 29 黒褐色土 (10YR2/2) 地山ブロック含む。
- 30 黒褐色土 (10YR3/2) 地山粒含む。
- 31 黒色土 (10YR2/1) 地山粒含む。
- 32 黒褐色土 (10YR3/1) 地山ロームブロックわずかに含む。
- 33 黒褐色土 (10YR3/2) 地山ロームブロック含む。
- 34 黒褐色土 (10YR2/2) 地山粒わずかに含む。
- 35 黒褐色土 (10YR3/2) 地山礫含む。
- 36 黒褐色土 (10YR2/3)
- 37 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 砂質。
- 38 黒褐色土 (10YR2/3) 地山礫含む。

第13図 SB4 (2)

表2 SB4柱穴一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考	ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	45×43-42		P 14	42×37-30	柱痕跡径22cm
P 2	42×38-42		P 15	28×23-23	柱痕跡径18cm
P 3	47×45-41		P 16	30※×27-19	
P 4	47×47-46	柱痕跡径25cm	P 17	34×23-4	柱痕跡径24cm
P 5	56×55-36	柱痕跡径19cm	P 18	27×23-20	
P 6	53×48-40		P 19	44×43-10	
P 7	85×67-36		P 20	35×43-24	柱痕跡径13cm
P 8	56×42-29		P 21	33×32-19	
P 9	41×40-34		P 22	31×28-16	
P 10	41×40-38	柱痕跡径20cm	P 23	35×28-25	
P 11	40×35-22	柱痕跡径15cm	P 24	30×28-25	
P 12	55×43-19		P 25	25×25-24	
P 13	34×31-5				

～25cm、側柱が14～24cmであり、側柱の方が若干小さい。SB3と比較すると、約10%小型化している。

入側柱の掘方、柱痕跡および柱当たりの痕跡の並び具合を見ると、一直線上に並ばず、建物の中間で柱1本分外側に位置している。東側桁行の入側柱のP1～P5が、西側桁行の対になる柱穴よりも、柱1～2本分南に配置されているため、柱列が直角にならず、いびつな平面形をしている。

身舎の柱間寸法は、東桁側柱列が北(P1)から順に2.5m・2.3m・2.3m・2.2m・2.1m、西桁側柱列が北(P13)から順に2.4m・2.1m・2.2m・2.2m・2.5mである。梁行は、北妻側柱列が東(P1)から順に2.3m・2.2m、南妻側柱列が東(P6)から順に2.2m・2.2mである。

廂の柱間寸法は、東桁側柱列が北(P25)から順に1.3m・2.2m・2.5m・2.4mである。梁行は、北妻側柱列が東(P25)から順に1.3m・2.1m、南妻側柱列が東(P19)から順に1.0m・2.2m・2.2mである。廂の出については、東の桁側が平均1.33m±0.08、北の妻側が平均1.48±0.11m、南の妻側が平均1.5±0.1mとなり、南の妻側が広い。このため、身舎と廂の北東、南東の隅柱の角度(北東P1-P25、南東P6-P19)は、それぞれN-45°-E、S-35°-Eを測ることから、南妻側の屋根勾配が、ほかの二面の屋根勾配よりも緩やかであった可能性が考えられる。

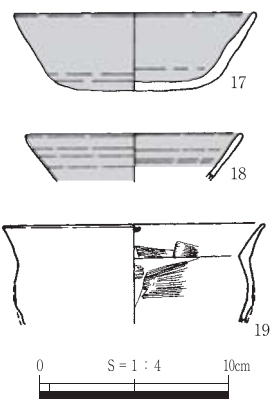
入側柱と側柱はおおよそ対の位置関係にあり、身舎と廂の柱筋を通す意図がうかがえる。

遺物は、柱掘方埋土中から出土した。17・18は赤色顔料塗彩の回転台土師器坏である。17はP9からの出土で、伯耆国庁第2段階に相当する。19は土師器小型甕で、18とともにP3から出土した。

SB4の時期は、出土遺物の年代から9世紀後半ごろと推定できる。土器型式ではSB3の時期と同じであるため、SB3からSB4への建て替えは、あまり時期をおかず行われたものと推定できる。

SB5 (第15・16図、表3、PL.8・18)

調査区南東側のE6グリッドにあり、標高69.7m付近の平坦面に立地する。造成土除去後のD層からE層上面で検出した。大半は南側調査区外へ延びている。西側3mにはSB6、北側約9mにはSB3・4がある。



第14図 SB4出土遺物

桁行2間(4.2m)以上、梁行2間(4.4m)に復元できる掘立柱建物跡で、大半は南側調査区外へ延びる。平面は南北に長い長方形を呈すと考えられる。長軸はN-12°-Wで、平面積は4.2㎡以上である。SB6と長軸方向を揃える。梁の中央に当たるP6は、桁軸線上より外側にわずかにずれる。柱穴間距離は、P1-P2間から順に2.1m、2.1m、2.1m、2.1m、2.3mを測る。柱穴の規模は、径32~50cm、深さは12~31cm程度を測り、長径の平均は41.67cm、短径の平均は38.17cm、深さの平均25.5cmと、SB3・4に比べて一回り小さく浅い。

柱穴の埋土は、いずれも黒褐色から黒色土を主体としており、炭化物を含むものもある。P4・P5・P6では、柱痕跡を確認した。柱の推定直径は16~19cmである。

遺物は、図化したものにP4埋土中から出土した須恵器甕片20がある。外面平行叩き、内面同心円文当具痕が施される。

出土遺物では詳細な時期を特定できないが、周辺の遺構のあり方から、平安時代中ごろのもので、倉庫の可能性はある。

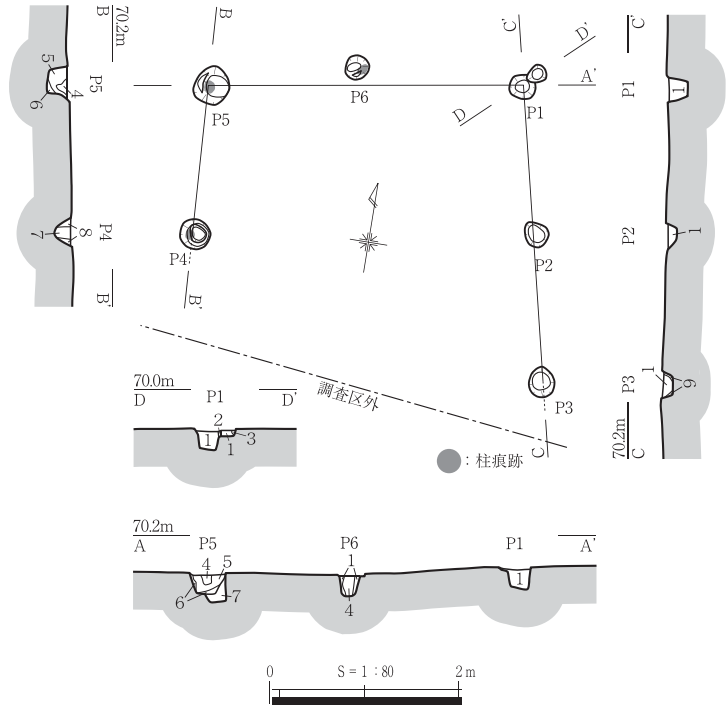
SB6(第17・18図、表4、PL.8・18)

調査区南東側のE6グリッドにあり、標高69.6m付近の平坦面に立地する。造成土除去後のD層からE層上面で検出した。大半は南側調査区外へ延びている。東側3mにはSB5、北側約10mにはSB3・4がある。

桁行1間(2.1m)以上、梁行2間(4.7m)に復元できる掘立柱建物跡で、

表4 SB6柱穴一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	49×47-22	柱痕跡径27cm
P2	51×42-35	柱痕跡径23cm
P3	45×32-32	柱痕跡径18cm
P4	53×44-31	

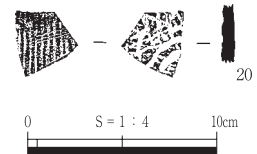


- ①黒色土 (10YR 2/1、粘性あり)
- ②黒褐色土 (10YR 3/2、ローム粒含む、均質)
- ③明黄褐色粘質土 (10YR 6/6、黒褐色土粒わずかに含む)
- ④黒褐色土 (10YR 2/2、ローム粒わずかに含む、炭化物わずかに含む、柱痕)
- ⑤黒色土 (10YR 2/1、ローム粒わずかに含む、炭化物わずかに含む)
- ⑥黒褐色土 (10YR 2/3、AT粒含む)
- ⑦黒色土 (10YR 2/1、ローム粒わずかに含む)
- ⑧黒色土 (2.5Y 2/1、均質、柱痕)
- ⑨黄褐色土 (2.5Y 5/6、黒色土混)

第15図 SB5

表3 SB5柱穴一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P1	38×36-29	
P2	39×32-12	
P3	42×36-17	
P4	44×46-28	柱痕跡径19cm
P5	50×47-28	柱痕跡径18cm
P6	35×33-31	柱痕跡径16cm



第16図 SB5出土遺物

大半は南側調査区外へ延びる。平面は南北

方向に長い長方形を呈すと考えられる。長軸はN-12°-Wで、平面積は4.2㎡以上である。SB5と長軸方向を揃える。梁の中央に当たるP4は、桁軸線上より外側にわずかにずれる。柱穴間距

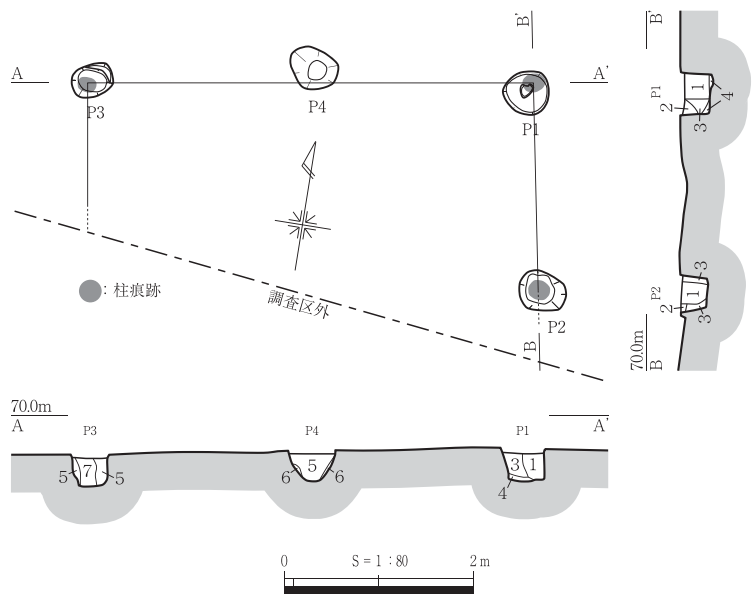
第3章 調査の成果

離は、P 1 - P 2 間から順に2.1m、2.4m、2.2mを測る。柱穴の規模は、径32～53cm、深さは22～35cmを測り、長径平均49.5cm、短径平均41.75cm、深さ平均33cmである。SB 3・4 に比べて一回り小さく浅い。

柱穴の埋土は、いずれも黒褐色から黒色土を主体としており、柱掘方埋土には黄橙色系の土が使用されている。P 1・P 2・P 3 では、柱痕跡が確認され、推定される柱の直径は18～27cmである。

遺物は、図化したものにP 2埋土中から出土した土師器坏21がある。内外面赤色塗彩が施された、回転台土師器である。

出土遺物から、伯耆国庁第2段階、平安時代中(9世紀後半)ごろのものと考えられ、倉庫と考えられる。



- ①黒褐色土 (10YR 2/3、暗黄褐色土粒を含む、炭化物わずかに含む、柱痕)
- ②にぶい黄橙色土 (10YR 6/4、砂礫含む)
- ③黒色土 (10YR 2/1、砂礫わずかに含む)
- ④暗褐色砂礫混土 (10YR 3/3、砂礫多量に含む)
- ⑤黒色土 (10YR 2/1、均質)
- ⑥暗褐色土 (10YR 3/3、地山ローム：砂礫わずかに含む)
- ⑦にぶい黄褐色土と黒褐色土混 (5YR 4/4 に 10YR 3/1 混、炭化物わずかに含む、柱痕)

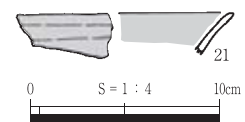
第17図 SB6

3 柵列

SA 1 (第19図、表5、PL.9・10)

調査区のほぼ中央のB 7・C 7・D 7・E 7グリッドにあり、標高68.9～69.2mのほぼ平坦面に立地する。造成土を除去した後のE層及びF層で検出したが、本来はさらに上層から掘り込まれたものと考えられる。東側約5mにはSB 3・4がある。

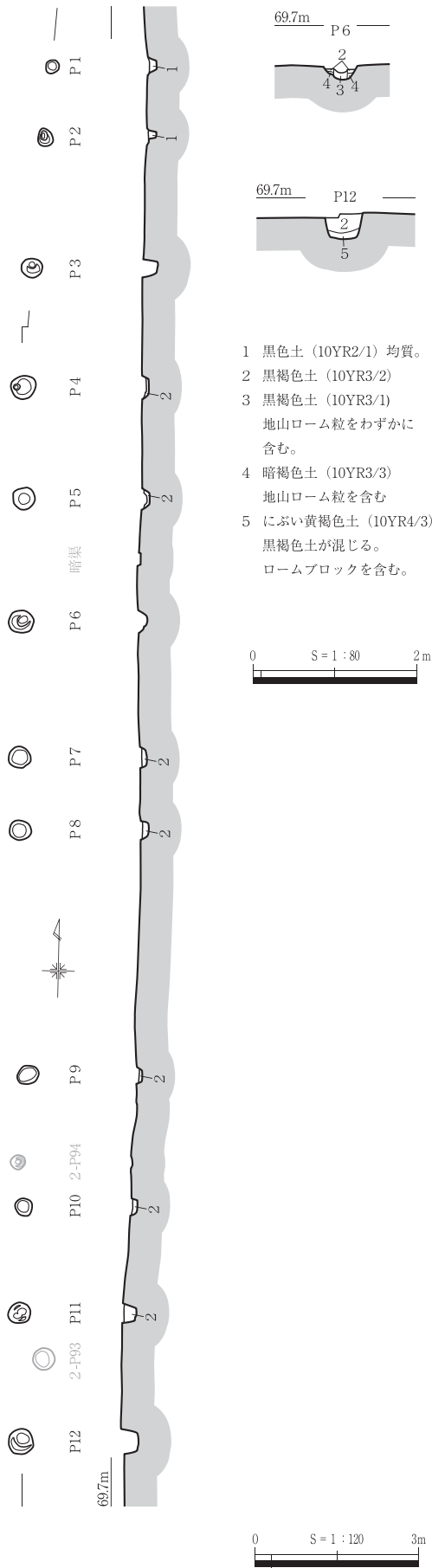
P 1～P 12までの一列に並ぶ12基の柱穴からなる。調査区中央を横断するように、総延長25.2m以上を測るが、さらに南北調査区外に延びるものと推定する。列の向きは、P 4以北がN - 4° - W、P 4以南がN - 1° - Wで、東側のSB 3・SB 4と同様に、真北に近い向きである。柱掘方の平面は円形で、規模は長径24～48cm、短径23～46cm、深さ10～34cmとばらつきがある。平均値はそれぞれ長径39.25±6.42m、短径36.08±6.68m、深さ18.91±7.49cmである。柱穴間の距離は、P 1から南に向かって、1.25m、2.35m、2.25m、2.05m、2.2m、2.5m、1.35m、4.5m、2.45m、1.95m、



第18図 SB6出土遺物

表5 SA 1柱穴一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	24×23-12	
P 2	34×27-20	
P 3	48×35-26	
P 4	46×41-16	
P 5	41×40-17	
P 6	44×44-17	柱痕跡径13cm
P 7	40×39-11	
P 8	39×35-18	
P 9	41×34-9	
P 10	34×30-14	
P 11	41×38-27	
P 12	48×46-30	



第19図 SA 1

2.3mとなる。P 1 - P 2間とP 7 - P 8間の幅が狭い一方、P 8 - P 9間は柱間2間分の幅が空き、この部分が開放され、出入り口となっていた可能性がある。P 1 - P 8間の柱間平均は $1.99 \pm 0.49\text{m}$ 、P 9 ~ P 12間の柱間平均は $2.23 \pm 0.26\text{m}$ である。

埋土は、黒色土から黒褐色土系が主体で、各柱穴1 ~ 3層に分層できた。柱痕跡は、P 6のみで確認し、その直径は13cmである。

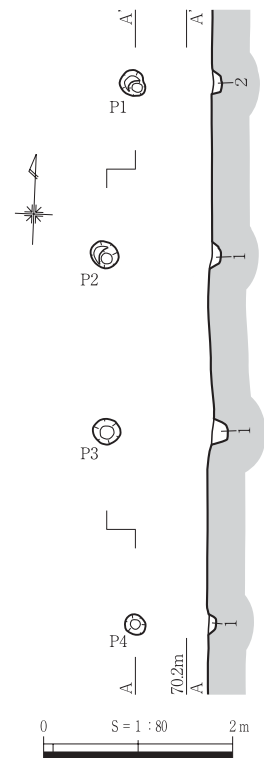
P 1の埋土中から土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期を特定できる遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、平安時代と考えられるSB 3・4と主軸がほぼ揃い、周辺から同時期の遺物が出土していることから、当遺構も平安時代ごろのものと考えられ、建物群の西側を区画する柵又は塀であったと考えられる。

SA 3 (第20図、表6、PL.11)

調査区南東側のE 6グリッドにあり、標高69.9mのほぼ平坦面に立地する。造成土を除去した後のF層で検出したが、本来はさらに上層から掘り込まれたものと考えられる。西側約3mにはSB 5がある。

4基からなる柱穴で構成され、N - 10° - WからN - 8° - Eと南北方向を意識するがやや湾曲して並び、長さ5.6m以上に亘って検出した。さらに南側調査区外へ延びるものと考えられる。



- 1 黒褐色シルト (10YR2/2)
径1 ~ 5mmの礫が5%混じる。
- 2 黒褐色シルト (10YR2/2)
地山ブロックが40%混じる。

第20図 SA 3

表6 SA 3柱穴一覧表

ピット番号	規模(長軸×短軸-深さ)cm	備考
P 1	28×26-11	
P 2	31×27-11	
P 3	29×27-19	
P 4	23×20-10	

第3章 調査の成果

柱穴の規模は径20～31cm、深さ10～19cmを測る。柱穴間距離はほぼ一定で、P 1 - P 2 間から順に1.8m、1.8m、2.0mを測る。

埋土は、黒色土から黒褐色土系が主体で、各柱穴1～3層に分層できた。柱痕跡等は確認できなかった。

遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、平安時代ごろと考えられるSB5・6と主軸がほぼ揃い、周辺からも同時期の遺物が出土していることから、当遺構も平安時代ごろのものと考えられる。

4 土坑

SK 5 (第21～23図、PL.11・18・22)

調査区南西側の谷部、D12・E12グリッド境界にあり、標高68mの斜面部に立地する。大半が南側調査区外へ続くため全形は不明であるが、ここでは一応土坑として扱うこととする。

平面は不整形で、西側は圃場整備以前の水田によって掘り込まれている。規模は、東西7.3m、南北1.8mである。底面は外から内に向かって緩く階段状に落ち込み、深さは最大0.65mである。

埋土は底面に粗砂を多量に含むシルト(9層)が堆積し、その上部を粘土質のシルト(8層)が被覆する。土坑中央部において、9層中から9層の上面にかけて、こぶし大から人頭大の礫が集中して出土した。礫は亜角礫と角礫、円礫が混ざる。礫が集中する箇所より西側において、8層の下部から須恵器がまとまって出土した。

埋土中から出土した22は土師器甕である。頸部が外側に強く屈曲し、口縁端部は薄い。8層から出土した。23は須恵器坏である。体部は内湾し、無高台で、底部外面に回転糸切痕が残る。8層下部から出土した。25は須恵器甕である。砲弾形を呈し、底部が尖る。外面は平行叩き、内面は当具痕が完全にナデ消されている。8層下部から出土した。27、28は須恵器甕の胴部である。外面は平行叩き後カキ目、内面は同心円文当具痕が残る。27は8層下部から、28は8層中から出土した。24は須恵器鉢である。体部は内湾し、口縁端部を欠損する。東西の土層観察用畦内から出土し、その層位は確定できないが、SK5の検出中に周辺の遺物包含層から出土した複数の破片と接合したことから、出土層位は7層に比定される。S1は打製石鋏である。基部が折損している。8層下部から出土した。S2は敲石である。亜円礫を用い、3箇所になぞかに敲打痕が残る。9層中から出土した。S3は磨石である。円礫を用い、全面が研磨される。8層中から出土した。

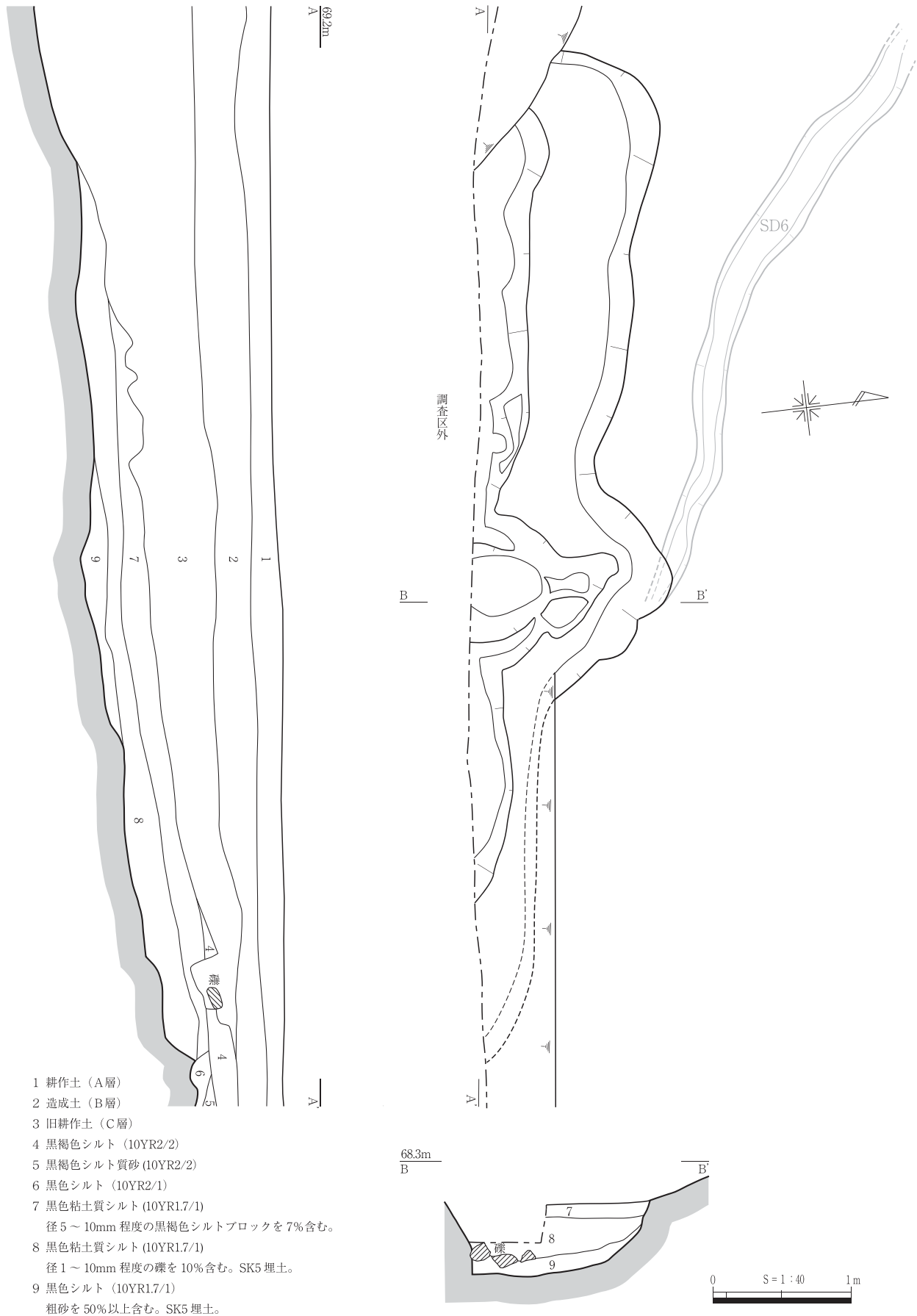
8層下部の須恵器の出土位置は、ほぼ同じ高さに揃い、付近の破片同士が接合することから、この場所で意図的に破碎し、廃棄したものと推定できる。

遺構の時期は出土した遺物から、八峠編年奈良前期、8世紀前半ごろと考えられる。

当遺構は、埋土の状態から、水浸かりの環境が推定され、河川あるいは池の縁辺であった可能性がある。

SK 7 (第24・25図、PL.11・18)

調査区北側境界際のB6グリッドにあり、標高69.4mの平坦面に立地する。検出面は圃場整備時に削平された、礫混じりのローム層(F層)である。東端がSB3の内側柱P1の柱掘方によって切られていることから、SB3に先行するものである。



第21図 SK5